



白芝山



美

叙



久留江杉屋老人今子官父千君
袴を襪北徑千世を踏西海千月
茂頂知三等那の春更科乃秋橋
立巖崎千一跋痛志之既星案
六十歌を余心——志心新耳順

=

乃妻字はる子息存父同門はく
を招き俳話正式を傳へ終る
華の千一管を素限海一校千系
操管蘇一秋志舞端の友と
遊へ志を飼と存父亦雪月
物乃貴哉桃く形矢々々なり贈る

乃夫白、字梓千一ちりも免父の歌
の夢は残ちるさ舞とあり此生は
乃世の友はを直千一妻の光
堂歌志を如千一筆を於話
寸中の無

流の一毎菴丈左府番云

寛政十一年己未暮日



仙遊之遊記



明の春父六十ノ成 名付け

官父

今朝の身は花の月花

枚蓋

物可此茶あり口切

丈丸

きくく下り茶をの萱草

楚産

そり井の漲れを付わす子履

竹丸

さうあまりの暮れ夏や丸

練五

茫くと只青子のまのひ

指馬

石れ居りまれまをり

蒼山

アフレ



初

かへ卷の袖う脊ををひすい 柏梁

雪ふたつき家内 乃北清 闌鴉

とせ一方を振まうを家上門口 椽三

ふれありしれもくく乃鐘 召車

玉髪うさうぬの栗かあさ 音凡

よき児あそりまのりを藤 万来

嚏の鼻押まを家持扇 岸車

石山舟のくれくとう 五蓮

の川と物家月乃東才向か 梨照

芒のうきれうきよせて 交 風涯

此秋まうき世の愛もおも 貞律

物何うぬ友と碁を歩 圭甫

友なきにさうをあくる上京を 官土

門の葵う脚扶拍附込 執筆

釣瓶をぬく水を味うて 枚蓋

哉後う哉家若坊主うち 丈左

八月のつとむつと久物ももの
 楚雀
 暮れ月先を走はいふ書
 官父
 湯あふや虫用となく端居志て
 凍五
 媚多た都れ立木 隔 依
 竹丸
 神主のあま月ほり依耳よみ
 小 蒼山
 赤名の執をたき 泉造り
 指馬
 風ふへ志るをる新河
 關鴉
 人五六人 向う立
 據三

わやくと流が人ごを追おる
 君車
 霜降一松 うちぬちろ
 音瓦
 月細く土用の光に有明
 万来
 汗うち 後正を依れ
 岸車
 十
 ちた紙の間り肩衣をい入
 五蓮
 ちや正 咳氣乃出つくせ
 圭車
 枇杷の葉より重雲白丸日の陰り
 風涯
 あまの采り鳥さしの来る
 貞律

娘やうに寺門おの小商 以 官父
 さつと一 峰とれ志めりし 丈左
 六十の父持人の花を是 楚雀
 今朝の元見成るは又是 君車

當日賀章至来
 任庭速

家久一 万母草の春も老るもの 凍五
 十かえをいれ流やあけつ朝乃友 指馬

月をろいふやむへきを人乃老 楚雀
 うちを洗て言し知り人乃春 蒼山
 月の徒急の春とて果報人 闌鴉
 此喜と栞七栞 毛先、毛の 栞梁

勢南玉環を去ると三ふあふ事申す
 一卿あは勝田と云ふ地や東南に栞
 初き北方を山に包て致景美へくも
 あは人來迎りて次を去りて日暮
 閑り聲を曲入りて春乃地ちあはて
 柴の折戸うちあつし朝ふらうく離

柳をえりて風を承る物の決をくちふ
半日菴も去あしりし官袴の
いとふちりぬる糸氣押風雪の思
やう寸狭く依階一糸乃去つ柄を
まじふたしりや耳の音をまじ
合子官父の大人且慶じ且祝ひ
急父をたしめくのをものいけれ
ハ予もさる席一ひや中起去る
枚堂の大人を祿一たいりつるのこ

月影う人を老くとる きれ
松久しき毎うれあこころ

據三
貞律

五音相通を和文にめくといふ

長き世のれいつよても松う春
色う香う概を齡いの三子とせり
糸うととねハ 花増 老なる
中くーい老ととえへし折う糸
くふれくあしと糸糸ー松う春
口の白ひをれ咲き花糸糸
静なる松やあしと日ー春
たのつし官父と父う耳の
まきらう小孫をたうえよ

君車
音凡
万来
岸車
圭車
五蓮
風涯

あはれひをこころめて人く
一白くさか

あつし竹をまつりまき
官士

世のちとそり白髪をほき
竹丸

とせり賀喜りつ
さふる雅ひをち

ひ年の何くか守る馬
一筆菴

當の探頭

又ひと男のかきりまき
楚雀

いふ寸り起し後ね探
凍五

春の西日大ユッ
負律

雪の汁まきりさぬ
竹丸

蛤り手を照くまき
蒼山

春風や尻の尻り人
君車

浪山をあらむき
風涯

積上したをり
枚蓋

莖芽きり雨や
岸車

暖やわりの才を
柏梁

雨ふくむ日の
万来

春の九毛のりさへうまじし
據三

鳥の来て浅黄さうらう屋敷
官士

山鳥の啼く暮るる春の月
闌鴉

夕秋の月有明夜空束る路
五蓮

らうをけが呪見家寺乃柙
指馬

赤土乃とつ託あるの雉乃声
音凡

春風や軍士を淺黄の山かつ
官父

物あるまのさく秋の一土つ
丈左

くくつ到来四季混雜之
句々をあらう寸

去りし物の系ある里と成るる
麻齋

いふ書るりめ合ちる原戸口
寸大

雪霰れうし無にゆるま
幹負

櫓の葉の白きの上に冬乃月
坡及

降雪の下り成り夕日
丘高

秋風の秋もささり枯き
飛鶯溝

待ちらし徳存の入い
五蓮

鯉鮒の口よりオニイモウ風 魯齋

地を摺りかきらう子よ女郎花 石人

浄前よりいを誰の 花 良古

樹泊てまゝ此の流の月おぼ 芭濤

まゝ糸のうかくしさと光るあり 他力

糸ねくくす流をせむく白いぶ 羅が

春風のぬいぐ 子をとをるまあり 右好

糸くもささるくや留士を下置く 可涼

旅人のやと帯あつせ小おちま 椿堂

隈もたれた丹やあゝも快く舞才 右竹

晩鐘や木槿の花の上をり 滄波

菊の花垣と紫あまき廣野あり 不及

山里り来るく松風のねえいぶ 子有

まをるを慮る

谷間切り峯を月あけをきき 聴雨

ふすくたれさ記暮てり人そ 奇峯

蘭のよや啓る志も返あふ影 蘿道

既今時斗やうに春公来以 飯詠

春を元て恋れを授たふあふ 菊羽

初九う喜れあふ移りあふ 舎乙

山いりりしを志く社の柳の影 叙流

いゝ獨きりり喜の凡も一ふ 龍石

古きあふ國いせの人く宸

句くもよきて志う才更ふ

あ後うわうちうし

西陰崖をうりたふ

春日

そ才り細き襟も交りあふ 枚蓋

湖いをくくと門先乃喜 丈左

あふさた舟り柳乃下掃て

泣きしのを泉愛るふふ 蓋

柱賣そとくくと通依あふ

鴨いつまりと池乃日南 左

赤良 蒸れ豆腐のつよ太正三 左

桐油の雲下のつよ太正三 蓋

骨接の熱くを待て昼に成 左

愧しき籍乃裾り附り 蓋

志やくと禁さるる赤木の糸織 左

雲のふり洗う中戸ひうく 蓋

上人よりくろ線取る月見 左

盆うらまの姉うそいつ 蓋

妹風の只看るのうに糺り 左

鳥の息いなくた夕暮 蓋

嘆きの一くくう又見え 左

胡葱 鮫 浮人のまとき 蓋

冴還る扇風の陰乃小世流 左

以消才あし乃噴き梳 左

とくうう泥かき上し細種 蓋

於七代神書をとらふと 左

今の旬 不つと時をのたまひり 蓋

柴のやうな家 柴をたたく家 左

寂一いきかすりあそり氣をとらぬ 蓋

とんとくへう 仇火たくと 左

自陀落か木 質々密の濡かし 蓋

いつくり志を家 家あのおろく 左

松の葉にちあすかがる初月あ 蓋

豆踏倒才 晴々近る 左

物ごとく味をさく品乃あす成 蓋

おんと撞ゆ才 山科乃鐘 左

誰やうし横顔のゆとお寺か 左

とんとく 傘をもたて縁せし 左

急のゆとく了えうりをもあて 蓋

藤れ盛もあし 二三 左

はくしとあす風流うあたまよこの
くゆくを取れを裁ぬの電いせの流
萩乃あすのとい砂乃あすをとかきあ

しも又おのりかへたしおのりかへたし
りもあはく人の白くをあらう寸のこ

春

お椿も 色もあつこそなる寸 ちのく 秋夫

とやうく 社て方角ゆいし春乃暮 洛 百池

あつこやものく見ゆるは蝶の音 上カ 紫陌

蛙鳴け子や戸ちりく住ちさん 秋四 五明

高さ才日れ風がし柳乃糸 伊達 竹冠

うく寸の来るふと見へ竹りく、見車

蕭々やへんく 子と成ふさう ニナ 柳莊

風志つういつん柳をひまく移し 洛 秋あ

教何事何ふも花志やもの、土卵

四五りを松風聞う寸 茶成り 湖南 馬涯

移し極し柳をくめり風わら歌 洛 芝山

めとこしとふあそおもへ帰る原 名コヤ 土朗

夏

糸も啼ももちり、社てあ葉 洛 定雅

蜂のあおの社さうく止るる 可 董

之ヶ月すそや短振るうつろり

十二
羅城

降ものし思へし降と鼻月雨

秋
吾長

鷄雛のそけり延る首乃臺

六
升六

影思もみくし鏡り懺乃糞

東
花縣

有めり方へちひきぬまし竹

湖
驛道

きむ思し花葉かられてかきつる

洛
馬印

追つめ依螢や水の上をり

魯竹

鑿栗咲てし似るなきものよ凡ふき

栗津
祐昌

あゝさに飛てりもそ閑古鳥

露
露香

えせそ葉のち重なりて五月雨

東
完来

祢きしの葵をふれ天氣は

雪
雪也

藪さくちや思やし糸せ看

伊
律大

さくそ花や浅茅の有り降葉寺

二本
文蘿

それた花のよ葉の上れ月おは

二十
寶園

涼しさうちゆるぬ山乃上

東
景兆

夕鳥れあり花を散てちるしき

甲
河都里

権

今朝の塚とともるに日乃光

東都 春蠟

あゝ一志てあゝ一もるに祝

大江丸

白木槿志つうり見れを志つう

池田 坊

萩まゝの柳もほふうう秋乃雨

長齋

いさ雪や糸あ差うさし扇

素郷

ああ一のなき鳥一を流すま

方明

沈七の限つとせり秋乃

特左

嘴とくかき子て看る丸圍乃馬

長翠

友をくれ志て七の作一丸月あ

岳路

雪くを困う志まう候乃月

岱青

桐の葉や細かく成てあ志成

月君

熟るう川風さむく成乃

頼瓦

此舟をほすてるう文菊乃志

洛 舟水

松山やあゝ一を志す候乃力

林底

秋雨の燐戸叩うとれ乃

子舟

名月やかし暇を几尊あうり
イロ 榎堂

夕烟りかゞけくさし薄もしち
東 成義

暮の明成もまゝぬ九月一の歌
クハ 雪江

鳥啼て世を捨つゝ汝定きり
シナ 伯先

啼よきて戸りもささるるまきむす
カサ 朔宇

降おほす秋のまゝれや菊乃上
シナ 希言

あゝ低き居りうゝあや秋のる
洛 蒼虬

うわゝ来るる芒や園れ及ひおし
シナ 維路

人形や時きり尺の夕あふ
洛 甫尺

音推の音あう流ぬ中うら
ナニハ 尺苾

まゝ霞や以乱れと物乃ほ
洛 都雀

流んほりて啼口尺へて月乃若
ナニハ 友國

秋風やう流あまを帯くす
三河 卓池

妹風を菊の上りもとくか
タシハ 氏陵

小男若の二形り秋をつら
陸奥 冥之

傘さしう高たうよる連も
洛 嘯山

穂まねや掛へハ風の吹崩し 洛 丈左

あつらう園も見て来と次 辰花 不二

冬

こつ雪を敷うもや才名 東 七虎

むね立てち 三 南陽

冬ふきり旦のま 三十一 雲帯

馬盤 洛 太溪

大坂 三十一 八子坊

明方 出羽 呂楠

木 東 葛三

冬 洛 桃江

ひ 陸 二本松 乙調

風 三十一 自樂

足 洛 栗下

早 東 一茶

枯 洛 瓦全

風の上を浅回のけふりり

山タケ堆イ淵

相らえうひとて圓おろし

江カ東ホ風

おもしろねを志られてし

江カ蓼

あやそし渾も定め才常ち

加賀カ眉山

柿の蔭葉まきのふれ朝を

上毛カ一カ奥

枯蓼ろりう才雪か依沢也

沢田カ樊圃

うさくと松の笠ろりつ

十三カ八カ奇淵

死ねろりそとれて空し

栗津カ厚

神無月

あり里をさしてまろく山臥りか
あふ石あり下乃名を一の嵐中
赤か一身菴是を慈翠寺誰く
たうといひしを尋ねたおの社を
日比り物うたえき社をものう
つらかつきつ
祝とく

たうくさそ依念もあひる案あふ石 官父

家おほまのりそ人つさう
そやゆをや正戸を案出て
告降ぬ人くくち駱を追ひ
栗りふ案とつ依りて

きて降才るや菜種を打出才 一カ菴

雨いず〜〜〜あて神さんをも象〜〜の
氣を〜〜〜しきれもるの洞窟〜〜〜
るるにを〜〜〜わ〜〜〜を日新け〜〜〜
竹丸乃去此言〜〜〜や〜〜〜や〜〜〜
蛇しと去丸う曰〜〜〜と〜〜〜
〜〜〜と〜〜〜と〜〜〜を罪了〜〜〜
をりや雨〜〜〜の者〜〜〜言せ〜〜〜
丸〜〜〜たりた〜〜〜言〜〜〜
新端〜〜〜も〜〜〜し丸〜〜〜
人〜〜〜も〜〜〜と〜〜〜

幸の山あり白う〜〜〜竹丸

故て〜〜〜霧も〜〜〜
り〜〜〜

雨を〜〜〜の〜〜〜山〜〜〜
板蓋

柳村を〜〜〜りき出〜〜〜
出〜〜〜や〜〜〜
あり〜〜〜

物〜〜〜岩の〜〜〜
夫左

押き流〜〜〜
〜〜〜

川を左〜〜〜

古木板蓋も人〜〜〜
〜〜〜
つきて

山雨勢〜〜〜

丸のこまきり息り物くもくもきりて
らうらうし 下三

蚕考る小糸の糸れを糸ありて

日と新鳥のせりしなれた月

官父

帷子の袴を合寸獲 風り

楚雀

露降し山に風を裁きり

君車

下略此三章ハ后ニ次ノ詞也

一坐十句

但一題双線香五分限各
吐句如走泉不遇三時作
二十余吟一と云菴撰之白
雪五百余吟採此十箇一双著
而已都テ題ヲ略ス

野柳の只虫を家もとりけり

楚雀

ひのけの襦をこきり候 月

枚蓋

水涸りて田標の糸もかきぬ

そそかき焼野のそよ風のあり

官父

糸より注連製札よりもちを新しや

竹丸

新さうらう釋ちりて新ながき糸

蒼山

糸坂れ花も咲きり沖影 依

君車

日の昼や焼野を標り以れり

五蓮

去たりの入相の下通るを利

楚雀

永きりを梅拵てり男を難

杖藜

伯樂の折て過るの木此乃志

君車

志の予くく世の事の下をり

魯齋

風れ志ふとくの答とかけり

官父

起くやとく方れ撞く寸む

柏梁

春の松を隣つて以て拵り

音瓦

初さく責 是れ人乃通じて

蒼山

連翹の志及のほ家蝶物

万束

爐 用んとおもひよ家日をる降

楚雀

藤の志共おもむく下を 志原

杖藜

春風とおもひ神よりニカ矣

官父

寺より来る雨のさくくと成る

志さく葉より跡をさく

蒼山

元の暮僧ハ静り 帰るなり

ぼたくとゆい鳴りしきり庭板

杖藜

三ヶ月の入る橋のあまのし 竹丸

あさくう月を却て戻りたり 官父

切原をさし火くさり流さ 五蓮

天春く来て七日の程寸まの條 柏梁

あさくを彼岸の入りあハれをり 音瓦

橋の門くさ丹く暮りたり 官父

浅茅野の煙やうさり暮る月 君車

堤く踏や垣根の籠 月 風涯

席おちろき花を扱ふ花んやちを
いひよりて黄暁いさうか山くすか
無りすてさ下りやとさ又且りさお花

丹出てあさくしさ山さく 楚雀

糠星のあわれく流や流く上 君車

枕中ろ花状にる 松蓋

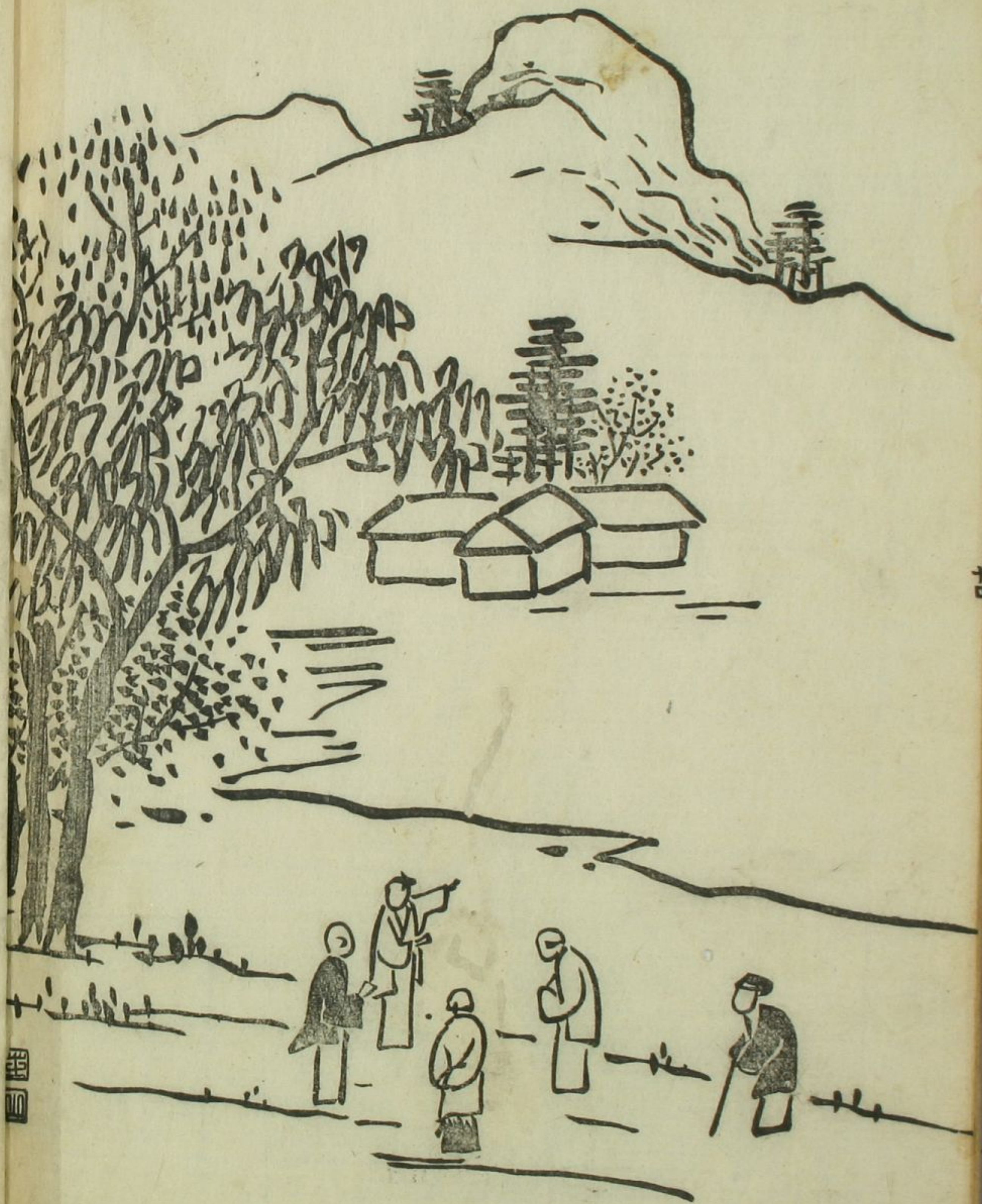
麻魚摺をあかり霞のねさく 竹丸

又さくも眠にり来きさりさく松丈左

おもひ出寸くも咎かり 山さく 官父

文一 ちのちのこをいふ
 三浦のすけさきいふに
 ちのちのこをいふに
 はつたをいふに
 のちのちのこをいふに
 いふに
 のちのちのこをいふに

ちのちのこ
 ちのちのこ



かきつね
ちのさくいふら
し

いふ
又のさくいふら
し

寛政十二年己未春三月
新ちのさくいふら



